



高瀬中だより

校長通信 No. 9
2022.1.11

「努力は決して裏切らない」～第98回箱根駅伝に思う～ 校長 千秋 久宣

年始の校長通信で「箱根駅伝」について書くのも今年で3年目となりました。今年も1月2日、3日両日に98回目の「箱根駅伝」（正式には東京箱根間往復大学駅伝競走）が開催され、青山学院大学が2年ぶり6回目の総合優勝で幕を閉じました。

「箱根駅伝」は、長距離走を専門とする陸上競技部員であれば、誰もがあこがれとする場所であり、そのために関東の大学に入学する人も多く、なかには、就職を遅らせてまで、この駅伝をめざしたり、社会人になったあとも箱根路を走るために再度入学したりする選手もいると聞きます。今年、中学校の教師を一時期休職して大学生として箱根路を走ったランナーもいました。

「先生と生徒のたすきリレー実現」

「毎年、箱根駅伝にはドラマがある」私はいつもこう思いながら、そのドラマを伝えるべく、通信を書いています。今年のドラマは4区から5区の小田原中継所で起こりました。初出場の駿河台（するがだい）大学が先生と生徒のたすきリレーを実現させたというものです。ドラマといっても実際のことであり、以下に詳しく紹介したいと思います。

埼玉県の中学校教師をしていた今井隆生選手が箱根駅伝出場を夢見て、教師を一時休職して駿河台大学心理学部3年生に編入したのは、2020年のことでした。2021年、4年生となった今井選手は見事に選手として選ばれ、2022年、1月2日、4区を任されることになりました。社会人から大学生となり、夢をかなえた瞬間でした。結果は区間20位。チームも18位から最下位の20位となってしまいます。しかし、この時、もう一つのドラマが待っていたのです。5区で待ち受けていたのは、かつての教え子で同じ大学の3年生、永井竜二選手でした。永井選手は今井選手が中学校教師として駆け出しの頃の陸上部の教え子だったそうです。箱根路を走るという夢の実現、まさか教え子にたすきを渡すことになるとは誰が予想できたでしょうか。

走り終えた今井選手は、かみしめるように次のように話したそうです。

「前日、永井と頑張ろうと話しました。誰もができることではないと思います。永井と僕を結んでくれた監督にも本当に感謝しています。」そして、監督から「ありがとう」とねぎらわれた今井選手は涙を流して崩れ落ちたといえます。

夢を追い続けていた今井選手のことを、教え子である永井選手は「姿勢や取り組み、すべてを箱根駅伝を第一に考えていました」と尊敬していたそうです。

4月からは再び、中学校教師として復職する今井選手の人生をかけた挑戦は終わりますが、駿河台大学に新たな歴史と後輩に勇気をもたらすことになったのではないのでしょうか。

ちなみに監督である徳本一善さんは、かつて法政大学時代には「爆走王」として箱根駅伝でも有名な選手でしたが、一度、自分が途中棄権し、たすきを途切らせてしまった苦い経験もっています。私は、20年ぐらい前、その時の様子をテレビで見っていたのをはっきりと覚えています。今度は監督として、たすきを途切らせることなく、初出場の駿河台大学を完走に導いた功績も称えられることでしょう。

